

# 日本の《発見》——西欧人／日本人による《旅行》と 明治・大正期のガイドブック ～ポール・クローデルの目に映った 1898年と1920年代の間の日本を例として

根岸 徹郎

## 1. はじめに

幕末から明治、大正期にかけて西欧諸国から日本を訪れた外国人は、各地でのさまざまな体験を経てそれぞれが異なった反応を示し、また個々の立場から自らの見解を書き残している。彼らが行った多くの《発見》と《解釈》は個人的なレベルを越え、訪問者の背後にある文化的な見方を反映したものとして興味深い。1920年代に駐日フランス大使として東京に滞在したポール・クローデル (Paul Claudel, 1868-1955) は、フランスのことについて語って欲しいという依頼に対して、1922年(大正11年)の夏に日光で行った講演<sup>1</sup>でこう述べている。

自分の国について語るの、自分自身について語るのとほとんど同じようにむずかしいものです。われわれが自分自身について描いてみるイメージと、わざわざわれわれを見に来られた方々の新鮮で真心のこもった目に映る私たちの姿の間には隔たりがあります。この隔たりのもつ面白さは、旅行者たちが書きたいいろいろな本の中で十分味わうことができます。

確かにこうした旅行者たちを素朴すぎるとか悪意があるといって非難するのは容易です。けれども、間違っているのはいつも彼らの方で、われわれのみが自分自身の反駁の余地のない証人であるというのは本当に確かなことでしょうか。実のところ、人はたいてい自分が今何をやっているか知らないまま行動しています。直ちに人に説明することができるような合理的で明瞭な動機によってではなく、人が動くのは習慣によってであり、そのときの状況や義務や欲求のうながしに応じて本能的、即興的に反応することによってなのです。

[……] われわれにとっては全く必然的で当然のこのように思われるあれこれの仕草や存在様式や精神の態度、これらが実は逆にもっている特徴や特殊性や、しばしばそこにあ

---

<sup>1</sup> 早稲田大学教授の五来欣造の依頼による。五来はクローデルが自分の座右の書であると語るミシェル・ルヴォン (Michel Revon, 1867-1947) の『日本文学選』(Anthologie de la littérature japonaise, 1910) の編集の協力者だった。

るユニークさを見分けることができるのは外国人だけなのです<sup>2</sup>。

たしかに、「外」からの視線こそが「内」に留まっていたのでは見えてこない新鮮な驚きを提供してくれるというクローデルのこの指摘は、わたしたちにもよく理解できるものだろう。それではこうした「外」の視線に対して、「内」の目はどのようにそれを受け止め、あるいは応答してきたのだろうか？ 外国人の視点や発想から生まれたスタイルがそれまで日本人が見てこなかった部分に光を当て、そのまま日本に根付いていったケースもまたいろいろな領域で見られることは、さまざまな例が示してくれている。わたしたちの生活において、今日では当たり前のようにになっているものの起源に欧米からの見方が投影されているケースは、実際、数多く見出せるはずである。

こうした問題設定から出発して、本稿ではとくに旅行、観光という分野に注目した上で、そこに情報提供源としての《ガイドブック》と先行としての《保養地》というテーマを立て、明治期から大正にかけてのそれらの変遷を追うことで、西欧と日本との文化的視線の交差について考察を試みたい。

## 2. クローデルと日本

最初に引用したポール・クローデルは、大正末の日本で「詩人大使」という愛称で親しまれた文人外交官で、富田溪仙（1879-1936）や竹内栖鳳（1864-1942）らの京都画壇の画家との交流や、能や文楽といった日本の伝統演劇に深い理解を示し、そこから豊かなインスピレーションを汲みとったフランスの詩人、劇作家として知られる。1921年（大正10年）秋から1927年（昭和2年）冬までの足かけ7年におよぶその任期中に、この詩人大使は日本各地を精力的に訪問している。その主な旅程を記すと、以下のようになる。

1921年（大正10年） 9月2日フランスのマルセイユ発／同月29日フランス領インドシナのサイゴン（現ホーチミン市）到着 フェエ等を経由して10月24日にハノイ着 11月7日ハノイ発／11月18日神戸港着／19日横浜港到着／20日東京の在日フランス大使館に着任

1922年（大正11年） 1月～2月摂政皇太子裕仁訪仏の答礼使として来日したジョッフル元帥に随行して京都、大阪、神戸ほかを歴訪／4月大宮散策／4月箱根、熱海、小田原、

---

<sup>2</sup> ポール・クローデル『朝日の中の黒い鳥』（内藤高訳）、講談社学術文庫、1988、p. 13-15.

鎌倉、江の島／5月関西訪問（京都、大阪、神戸）、京都帝国大学等で講演会／8月三浦半島探訪／夏、中禅寺に長期滞在／10月南足柄（最乗寺）訪問／10月日光および中禅寺訪問／11月宮ノ下散策／12月高尾山散策

1923年（大正12年） 1月成田山新勝寺訪問、日光訪問／4月京都、奈良訪問／5月中禅寺滞在／7月中禅寺滞在／7月千葉をドライブ／9月1日関東大震災罹災（東京一横浜一逗子を徒歩で移動）10月中禅寺滞在、湯元に行く／11月～12月大阪、京都、名古屋、静岡を廻る（東海地方では名古屋離宮、久能山等を訪問）

1924年（大正13年） 3月小田原、水戸、沼津、三津滞在 4月宮ノ下滞在 5月来日したインドシナ総督メルランに随行して京都、大阪、神戸、宮島、釜山を歴訪 7月富士登山 7月～8月中禅寺、湯元滞在 8月仙台、松島訪問 10月伊香保滞在 11月富士五湖散策 11月九州視察旅行 長崎、福岡、大牟田、雲仙、熊本、鹿児島、別府を歴訪

1925年（大正14年） 1月京都、大阪訪問 1月一年間の恩賜休暇を得て、フランス領インドシナ経由でフランスに一時帰国

1926年（大正15年／昭和元年） 2月日本帰任 3月高尾山散策 4月熱海滞在 4月～5月日本に寄港した軍艦ジュール・ミシュレ号で宮島を訪問、帰路に神戸、大阪、奈良、伊勢、名古屋を訪問／5月日光、中禅寺滞在／6月日光訪問／6月大宮散策／6月葉山滞在／7月京都訪問／7月中禅寺、湯元滞在／8月日光訪問、男体山に登山、また沼田を抜けて伊香保、軽井沢、前橋経由で日光に戻る／9月中禅寺滞在 軍艦マルヌ号に乗船して伊豆下田から神戸、岡山、屋島、高松、尾道、宮島、別府、宇佐、耶馬溪、湯布院等を廻り、帰路に神戸、大阪に寄る／10月秩父散策／10月日光、中禅寺滞在／12月関西（京都と大阪）を訪問し、関西日仏学院設立の準備と離日の挨拶をする

1927年（昭和2年） 1月箱根宮ノ下滞在／2月7日大正天皇の大喪儀に出席の後、2月17日にワシントンに向けて離日

このように並べてみると、詩人大使が訪れた場所は、北は仙台から南は鹿児島まで広範囲にわたっているが、一方で北海道、沖縄と日本海側には足を踏み入れていないことがわかる。その理由は明確ではないが、日本の伝統的文化に関心を持っていたクローデルにとっては、関西圏から九州にかけての地域<sup>3</sup>の方により目が向けられていたとしても不思議ではない。また、外交官として鉄道や航空機などの販路を広げる任務から、重工業の発達した太平洋側の方に訪

<sup>3</sup> 九州を訪問した際に、地元の新報のインタビューに応じてクローデルは、日本建国の神話発祥の地を訪問できてうれしいと語っている。大出敦・根岸徹郎「P・クローデルの九州旅行」、『青山フランス文学・語学研究』復刊12号、2003、p.186を参照のこと。

問の力点を置く必要があったことも、容易に想像ができる。さらに、当時の東京からの交通手段の利便性も、こうした偏りを生んだ原因のひとつとして考えられるだろう。

これらの旅行、各地への訪問の中でもジョッフル元帥やメルラン仏領インドシナ総督に随行したものは明らかに公務であり、それに伴う職務上の義務や制約等もあったと思われる。また京都と大阪、神戸に関しては、稲畑勝太郎たち関西財界人とのコンタクトや関西日仏学館設立に向けての連絡といった目的を持ったものが、重要な部分を占めていたと考えられる。とはいえ、こうした機会を上手に捉えて、クローデルは政府要人といっしょに宮島や四国を巡っている。

また、1924年（大正13年）秋の九州訪問では、最後に鹿児島から別府に鉄道で向かっている。これは開通したばかりの日豊本線を視察することがひとつの目的だったが、到着した別府では市長の案内の下で「地獄めぐり」を楽しんでいる。クローデルは当時としては格別に温泉を好んだ西洋人のひとりであり<sup>4</sup>、別府には1926年（大正15年）にも再訪し、そのときには当時、積極的な温泉経営を行っていた油屋熊八の「亀の井ホテル」に泊まり、「別府に／われ再び訪れん／温かきいで湯と／温かきもてなしに／わがいのち甦る／温かきいで湯／なごやけき人の心／われ再び別府に／来らむ 1926年9月25日」*« À m. Kumahachi Aburaya / Je reviendrai à Beppu / pour me plonger dans les eaux chaudes et vivifiantes de l'hospitalité japonaise / P. Claudel / 25 sept. 1926 »*という詩を贈っている<sup>5</sup>。

その一方で、関西訪問では宮島綱男<sup>6</sup>や喜多虎之助<sup>7</sup>といった知人、富田溪仙や竹内栖鳳らの京都在住の画家たちとの交流を目的とするものも多くあり、溪仙の嵐山のアトリエでは数時間も過ごすなど、日本の文化に深く親しむ機会を得ていた。

こうしてさまざまな地を訪問したなかでも、東京近郊に足を運んだものには、プライベートな楽しみの色合い濃いものも数多くあったと推測される。クローデルは大使館別邸のある中禅寺湖畔を深く愛したことで知られるが、たしかにこの中禅寺・日光と箱根宮ノ下への訪問はかなり頻繁かつ定期的であり、これが詩人大使にとって一種の保養目的であったことは、おのずと窺い知ることができるだろう。とくに中禅寺湖畔は詩人クローデルにとっては靈感を授かる場であり、この地で「水の上に水のひびき 葉のうへにさらに葉のかげ (Bruit de l'eau sur de

<sup>4</sup> 別府のほか、伊香保などにも足を運び、日光の湯元、箱根の宮ノ下では何度も温泉を楽しんでいる。

<sup>5</sup> 現在、別府の北浜公園には「別府を讃う」として、この詩碑が立っている。

<sup>6</sup> 関西大学で教授職にあった経済学者で、文楽に関する造詣が深いことも知られていた。クローデルに文楽を紹介したのはこの宮島で、後に詩人大使は「宮島教授への手紙」(*« Lettre au professeur Miyajima », 1926*)というエッセイを書いている。

<sup>7</sup> 喜多虎之助は当時、京都で外国人を客としていた古美術商で、クローデルは彼の案内でたびたび京都を散策している。

l'eau ombre d'une feuille sur une autre feuille)』<sup>8</sup> (山内義雄訳) といった優れた短詩が、いくつも生み出されている。

日光、とりわけ中禅寺湖畔が外国人にとっていかに魅力的な場所だったかについては、井戸桂子の『碧い眼に映った日光』(2015) に詳しい。それによると、先鞭をつけたのは後述するイギリスの外交官アーネスト・サトウ (Ernest Satow, 1843-1920) であり、彼が 1875 年 (明治 8 年) に『日光ガイドブック』(*A Guide Book to Nikkō*) を出したことが、その出発点となっている。これは「42 ページというささやかな英文のガイドブックであるが、日本で発行された英文のガイドブックとしては、明治 6 (1873) 年の京都、明治 7 (1874) 年の横浜に続く、3 冊目」<sup>9</sup> のものだった。こうした記述からも分かるように、日光はかなり初期の時期から外国人を惹きつけた場所で、1872 年 (明治 4 年) に鈴木ホテルが、さらにジェームズ・カーティス・ヘップバーン (James Curtis Hepburn, 1815-1911、日本での通称はヘボン) の薦めで金谷カッテージ・イン<sup>10</sup> が 1873 年 (明治 5 年) に営業を始めている<sup>11</sup>。

こうしてみると、外交官としての公務、あるいは個人の楽しみ、保養のためのいずれにしても、クローデルが日本を縦横に移動し、各地の風物を存分に楽しんでいることは間違いない。そしてそれは、こうしたクローデルの移動を支え、また滞在を可能にするだけの施設が、大正末の時期にはすでに日本全国に備わっていたことの証でもある。

移動に関しては、たとえば、東京と京都、大阪の間にはクローデルはしばしば夜行列車を用いているが、ほぼ一晩で目的地に到着していることが『日記』の記載などでわかる。列車での移動の場合、外交官用の特別仕立てのものを使うことは稀<sup>12</sup> で、一般車両に他の日本人といっしょに乗車するケースがほとんどだった。そうした折には、たとえば日光から仙台に向かう列車の中では、車中で弁当を食べる紳士然とした男や、人前で服を素早く替着替える女の姿に注意を向け、印象を『日記』に書き留めているが<sup>13</sup>、そこからは鉄道を利用した人々の移動がきわめて日常的なものになってきている状況を窺い知ることができるだろう。また、ときには自動車による移動も加わり、日光や中禅寺に行くためには列車で行くか、あるいは車を使う場合があった。

一方宿泊施設については、クローデルは西洋式のホテルに泊まることが基本で、東京では帝

<sup>8</sup> Paul Claudel, *Œuvres poétiques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1967, p. 738.

<sup>9</sup> 井戸桂子『碧い眼に映った日光』、下野新聞社、2015、p. 19.

<sup>10</sup> 現在の金谷ホテル。金谷ホテルの歴史については、井戸桂子の上掲書および富田昭次『ホテルと日本近代』、青弓社、2003 などに詳しい。

<sup>11</sup> 井戸桂子、上掲書、第一章「日光と外国人」および第七章「滞在先」を参照のこと。

<sup>12</sup> 九州旅行の際には、北九州では特別の列車が準備されたと思われる。大出敦・根岸徹郎、前掲書、p.184 を参照のこと。

<sup>13</sup> Paul Claudel, *Journal I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1968, p. 639.

国ホテル、関西では京都の都ホテルや大阪の大阪ホテル、箱根宮ノ下は富士屋ホテル、そして日光では中禅寺湖畔の大使館別邸を除けば金谷ホテルを常宿としていた。1924年に九州を訪問した際には、福岡では一番格式の高い日本旅館（栄屋旅館。現存せず）に宿泊したものの、息子に宛てた手紙では布団そのほかに不満をもらしているが、基本的には西洋スタイルの宿舎がほとんどの場合に準備されていて<sup>14</sup>、これらの地では外国人を受け入れるだけの施設がすでに十分に整っていたという状況をうかがい知ることができる。

こうしたクローデルの行動から透けて見えてくるのは、列車による移動、ホテルや旅館といった宿泊施設を利用して都市や保養地に滞在することが、1920年代初めには広く日本全体に行き渡っていたという事実である。次章で詳しく取り上げるアーネスト・サトウが1884年（明治16年）に出したガイドブックを読むと、この時点では外国人の日本国内の旅行はまだ完全に自由ではなく、「遊歩規程を越えて日本内地を旅行するためには、日本の政府機関が発行する内国旅券を取得しなければならない」状況であり、移動手段としては人力車が紹介され、道の整備はまだ不十分で、京都と宮ノ下を除けば宿は西欧風のもものがほとんどなく、食事に関しては「内陸部のほとんどの地域では旅行者は外国風の食事をするのは実際上不可能であり、現地の食物を摂れない人は自分用の糧食を持参しなければならない」<sup>15</sup>と説明されている。

それでは、このような不自由で悪条件だった初期の旅行状況から、大正期にクローデルが享受した快適さに至るまでの道のりはどういったものだったのだろうか？ また、そこでは日本にきた外国人たちが、どういった役割を果たしていたのだろうか？

### 3. 外国人による外国人のためのガイドブック——E. サトウとB. H. チェンバレンの『日本旅行案内』から『ケリーの日本帝国案内』へ～外国人が見たいものの紹介

クローデルが最初に日本を訪れたのは、フランス大使として東京に着任する1921年（大正10年）を20年以上遡る、1898年（明治31年）のことだった。これは先のサトウのガイドブックの最初の刊行とクローデルが大使として日本に赴任した時期の中間にあたる。このとき、若きクローデルは領事として上海に勤務中だったが、5月から6月にかけてのおよそ一か月にわたって日本に滞在し、各地を精力的に廻っている。オーギュスト・ロダン（Auguste Rodin, 1840-1917）の弟子で天才的な彫刻家だった姉カミーユ（Camille Claudel, 1864-1943）の影響で、若いころから北斎漫画等に親しんでいたクローデルの日本に向けられた関心はきわめて高く、

<sup>14</sup> 九州では、長崎ではジャパンホテル（現存せず）、雲仙は九州ホテル、大牟田は三井山ノ上倶楽部（現存せず）といった欧米人向けの宿泊施設に泊っている。大出敦・根岸徹郎、前掲書を参照のこと。

<sup>15</sup> アーネスト・サトウ『明治日本旅行案内』上巻、カルチャー編、（庄田元男訳）、平凡社、1996、p. 20-28.

後に「優れた芸術家だった姉は、日本に対して限らない賛嘆の念を抱いていた。そこでわたしも日本の版画や書物をいろいろと見ていたし、この国に強く惹かれるようになった」<sup>16</sup>と語っている。このように若いころからの憧憬の地だった日本へのはじめての旅行は、以下のような旅程だった。

1898年(明治31年)5月27日上海より長崎に到着／瀬戸内海経由で28日神戸到着／30日に横浜到着／6月1日東京を経由して日光に向かう／6月2日から3日にかけて日光／4日中禅寺に向かうが豪雨で引き返す／5日東京に戻る／6日東京を散策／7日横浜／8日国府津に向かい、箱根湯本、宮ノ下を経由して元箱根／9日熱海で入浴、横浜に戻る／11日東京散策、芝の増上寺、上野の美術館、浅草などを見学した後、横浜に戻る／12日江の島／13日御殿場経由で静岡／14日静岡で臨濟寺と浅間神社を訪問／15日に夜行列車で朝、京都到着。御所、北野天満宮、大徳寺、金閣寺訪問、也阿弥ホテル<sup>17</sup>宿泊／16日二条城、泉湧寺、金戒光明寺、銀閣寺、南禅寺訪問／17日神戸到着、明石の松林を散策／18日神戸を船で発って翌19日に長崎到着／20日長崎散策と海水浴／21日に長崎を出発して上海への帰路に就く<sup>18</sup>

日光では雨の中を中禅寺に向かうものの途中で引き返しているが、このときにクローデルは詩人として重要な啓示を受けている。この意味で彼にとっての日光・中禅寺体験はきわめて深い刻印を刻むものとなったが<sup>19</sup>、そうした文学的逸話はともかくとして、クローデルが日本で辿った道は今日の目からすれば、はじめてこの国を訪問した外国人の旅程としては一風変わったものであるように見える。領事館のあった長崎、神戸、横浜、公使館<sup>20</sup>が置かれていた東京は外交官として当然の訪問地であり、また、半世紀前までは天皇がいて日本の政治、文化のもうひとつの中心だった京都への関心は自然なものだったとして、それ以外の日光、中禅寺湖、国府津、静岡、江の島といった訪問場所の選択基準を、若き日のクローデルはどこから得ていたのだろうか？

もちろん、東京や横浜在住のフランス人から情報を仕入れたであろうことは容易に想像がつくし、日光・中禅寺はこの時点ですでに外国人の避暑などに人気の地だった。だが同時に注目

<sup>16</sup> Paul Claudel, *Mémoire improvisé*, Gallimard, 2001, p. 135-136.

<sup>17</sup> 1879年に京都の円山公園内に開業した也阿弥ホテルは、当時、外国人を受け入れた京都を代表するホテルで、ピエール・ロティも宿泊した。富田昭次『ホテルと日本近代』、p. 96-98を参照のこと。

<sup>18</sup> 中條忍監修『日本におけるポール・クローデル』、クレス出版、2010、p. 11-16を参照のこと。

<sup>19</sup> 『詩法 (*L'Art poétique*, 1907)』と「散策者 (*Promeneur*», 1898)」で語られているエピソードである。

<sup>20</sup> この時点ではまだ大使は置かれず、フランス政府の代表者は公使だった。公使館が大使館に昇格するのは、1911年の日仏通商航海条約改正以降のことである。

されるのが、彼がこの日本訪問の際に携えていたガイドブックである。それはバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) によるマレー社 (John Murray) の『日本旅行案内書』(*A Handbook for Travelers in Japan*) で、この当時、日本を訪れる外国人にとっては必携ともいえる本だった。そして、クローデルはこのガイドブックの記述にかなり忠実に沿って行動していると考えられるのである。

クローデルがこの本を参照していたということは、例えば彼の散文詩「そこここに」(*Ça et là*, 1898) の中で、京都の三十三間堂の由来に関わる記述が<sup>21</sup>、明らかにチェンバレンの故事紹介を下敷きにしていることから推定される<sup>22</sup>。さらにクローデルの旅程に関しても、「こう考えて、クローデルの文章と『手引き』の説明とをクローデルの旅程を追って読みくらべると、彼がきわめて忠実にこの案内の指示に従っていることが明らかとなる。そもそも五月二十八日に長崎に着き、海路横浜へ向かい、東京へ着くや、ただちに、六月一日にはすでに日光にいるというのも、『手引き』が教えている六月一日と二日の東照宮の祭礼を見物するためだったのである」<sup>23</sup>と渡邊守章は指摘している。

マレー社は当時、世界各国のガイド本を出版して名声を博していたイギリスの出版社だった。クローデルが携えていたのは1894年(明治27年)刊行の『日本旅行案内』の第4版で、編著者は上述のようにB. H. チェンバレン(W. B. メーソンとの共同執筆による)だった。1873年(明治6年)にいわゆるお雇い外国人として来日したチェンバレンは東京帝国大学等で教鞭を取りながら、日本についての著作(『日本事物誌』*Things Japanese*, 1890)の執筆や『古事記』の翻訳(*Ko-Ji-Ki, Records of ancient Matters*, 1882)などを行った、明治期の代表的な日本研究者のひとりだった。1911年(明治44年)まで日本に留まった彼は、アカデミックな仕事をこなすかわらで、日本旅行のためのガイドの執筆にも強い関心と意欲を燃やしていたという<sup>24</sup>。

ただし、チェンバレンが編著者として関わったのはクローデルが持っていたこのガイドブックの1891年版(第3版)からで、もともとこの本の初版はアーネスト・サトウによって書かれたものだった<sup>25</sup>。『一外交官の見た明治維新』(*A diplomat in Japan*, 1921)などの著作で知られるサトウは、1862年から1883年と1895年から1900年公使時代の二度にわたって日本

<sup>21</sup> 後白河法皇の頭痛(クローデルは歯痛としている)に関するエピソード。

<sup>22</sup> 渡邊守章『ポール・クローデル 劇的想像力の世界』、中央公論社、1975、p. 470を参照のこと。

<sup>23</sup> 上掲書、p. 470。

<sup>24</sup> ラフガディオ・ハーン宛の手紙でチェンバレンは、「旅行案内書の制作は、人生の最も大きな喜び」と語っている、『外国人が見た日本』で紹介されている。内田宗治、前掲書、p. 19。

<sup>25</sup> ただし、チェンバレンも協力者のひとりとして最初の版からこのガイドブックに関わっている。詳細はアーネスト・メイスン・サトウ『明治日本旅行案内』(下)(平凡社、1996)の庄田元男による「訳者解説」を参照のこと。

に滞在したイギリスきっての日本の事情に通じた外交官であると同時に、自分の足で日本中を歩いて訪ねた旅行家でもあった<sup>26</sup>。「日本アルプス」という今日では定着した呼び名を最初に活字化して用いたのはこのサトウであるというが<sup>27</sup>、彼自身も富士山、越中から飛騨、そして修験道の聖地である吉野といった峻厳な山々を自らの足で踏破している。

サトウは1881年(明治14年)に横浜のケリー商会から最初の旅行案内『中部北部日本旅行案内』(*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*)を刊行するが、彼は「当初からロンドンのジョン・マレー社から出版するようにと念願していた。マレー社は、西欧社会において世界の各主要国ごとの旅行案内を出版し、多くの人々から好評を得ていた。[……]一八八〇年頃のサトウ文書を読んでみると、彼はかなり以前から将来マレー社版『日本旅行案内』に結実するであろう高度な知識水準を持ち、かつ実用的なガイドブックの作成を心掛けていたことがわかる。そのような目標を心に秘めながら、サトウは日本国内の旅を続けている」<sup>28</sup>と、庄田元男は指摘している。

サトウの念願が叶って、1884年(明治17年)の第2版からはマレー社が出版元となるが、たとえば同時期に出版されたイザベラ・バード(Isabella Bird, 1831-1904)の『日本奥地紀行』(*Unbeaten Tracts in Japan*, 1880)と比べるなら、バードの作品が非常に刺激的でありつつも、あくまでも旅行記、印象記であることは明らかだろう。実際、1878年(明治11年)に日本に到着したバードはおおよそ2年かけてこの本を執筆するが、その「まえがき」で「本書は『日本についての本』ではなく、日本で行った旅の話であり、日本の現状に関する知識を広げるためのなんらかの足しになろうとする試みである。[……]日光以北のわたしのルートはすでに踏破された道筋からまったく外れており、完全に縦断した西欧人はひとりもいなかった。[……]『西洋人のすでに踏破した道』は日光をのぞき、数行で記すのみにとどめたが、東京(江戸)の場合のように、特徴がこの数年間に著しい変化を受けたところでは、多少概略を述べてある」<sup>29</sup>と明言しているように、ガイドブックではなく、探検記としてこの本を書いたことを認めている。

これに対してサトウの本は、明らかに日本を訪れる人たちにいかに有益な情報を与えるかを

<sup>26</sup> アーネスト・サトウはのべ450日、日本各地を旅行したという。内田宗治、前掲書、p. 15-19。

<sup>27</sup> 命名者はイギリス人のお抱え外国人ウィリアム・ガウランドだが、サトウは自著でその名称を用いている。こうした事情に関しては、『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』(庄田元男訳、講談社学術文庫、2017)所収の訳者解説(とくにp. 275-283「日本アルプスの発見」と「日本アルプスの命名者=ガウランド」)に詳しい。なお、地名の新たな命名に関して、井上幸孝による大航海時代にスペイン人がアメリカで行った命名の分析によれば、状況は異なるが、「日本アルプス」は「既存地名に準じた命名」に相当すると考えられる。井上幸孝「西洋の拡張と土地の命名(1)」(『専修大学人文論集』97号、2015)および「西洋の拡張と土地の命名(2)」(『専修大学人文論集』99号、2016)を参照のこと。ちなみに、木曾川を「日本ライン」と呼んだのは、『日本風景論』(1894)を著わした志賀重昂(1863-1927)である。

<sup>28</sup> アーネスト・メイスン・サトウ『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』、上掲書、p. 268-269。

<sup>29</sup> イザベラ・バード『イザベラ・バードの日本紀行』(上)(時岡敬子訳)、講談社学術文庫、2008、p. 4-5。

常に心がけていて<sup>30</sup>、日本での生活に対する細かな必要事項（初版では「地理」、「気候」から「旅宿」、「道路・乗物」など 15 項目。再版のマレー社版では、これらを「いわゆる英国人を中心とした『日本学』の研究水準に見合った」<sup>31</sup> ものにするために、大幅に補強している）をガイドに盛り込み、また行先別にルートを設定し（初版では 54 ルート、再版では 64 ルートに増補<sup>32</sup>）、それぞれに「里程」によって最初に距離を示し、その後で個別の目的地について、伝説から特色までを事細かに記している。もともとサトウが序文で書いているように、こうした形式はマレー社のガイドブックの体裁を踏襲したものだったが、当時の旅行者の多くが裕福な知識人だったことが、訪問先の文化的な情報を掲載するという編集方針に現れている。そしてサトウやチェンバレンのような優れた日本研究者にとってこの点を充実させることは、非常に重要な意味を持っていたことは疑いがない。

第 3 版から編集はチェンバレンに委ねられるが、旅行者に有益であろうとするサトウの理念はそのま踏襲され、この『日本旅行案内』は幅広い読者を獲得し続けた。1913 年（大正 2 年）の 9 版（1922 年に増補版）まで版を重ねていることが、その証左だといえる。このようにチェンバレンにせよサトウにせよ、日本を深く理解しようとし、また愛した人々の想いはこの『日本旅行案内』の最も重要な部分を支えていた。

ところで、サトウやチェンバレンが『日本旅行案内』を出した時期には、このジョン・マレー社とドイツのベデカー社 (Karl Baedeker) がヨーロッパでは旅行案内書の双壁とされていた。後に述べるように、ベデカー社からは日本ガイドが刊行されなかったため、英語による外国人向けのしっかりとしたガイドブックはアーネスト・サトウ、チェンバレンらによるものしかなかった状況だったが、チェンバレンが帰国したあとの 1914 年（大正 3 年）に、新たに分厚い日本のガイドブックがアメリカ人によって出版されている。それが『テリーの日本帝国案内 朝鮮、台湾を含む (*Terry's Guide to the Japanese Empire including Korea and Formosa*)』（以下、『日本帝国案内』と略記）という本である。

このガイドブックでは最初に、1. A「どうやって日本に行くのか」、B「旅費および通貨、両替、銀行、税関」から J「店、雑貨もろもろ、養殖真珠、水晶、翡翠」までを示したあと、続けて 2. 「日本語」、3. 「地理的スケッチ」、4. 「国旗、国歌、新聞、芸者、乞食」、5. 「柔術、レスリング、ハラキリ、刺青」、6. 「仏教建築」、7. 「神道建築と鳥居」、8. 「仏閣、城郭、橋、風景、庭」、9. 「仏教」、10. 「仏教の諸流派」、11. 「神道」、12. 「キリスト教、武士道」、13. 「日

<sup>30</sup> サトウはイザベラ・バードの著作の情報を有益なものとして高く評価している。

<sup>31</sup> 庄田元男「訳者解説」、アーネスト・サトウ『明治日本旅行案内』(下) ルート篇Ⅱ、平凡社、1996、p. 440.

<sup>32</sup> 1913 年の最後のものとなる第 9 版では、台湾も含め全部で 86 ルートになっている。 *Collected Works of Basil Hall Chamberlain, Major Works 8*, Ganesha Publishing/Edition Synapse, 2000 を参照のこと。

本美術」、14.「陶磁器」、15.「文学」、16.「簡単な歴史」、17.「略年表」、18.「書誌」といった項目の順に、日本に対する基礎知識が説明されている。

さらに本編に入ると、1.「日本中央部（ルート 1～12）」、2.「日本北部（ルート 13～18）」、3.「蝦夷、樺太およびサハリン（ルート 19～23）」、4.「日本西部（ルート 24～38）」、5.「九州および琉球と五島列島（ルート 39～43）」、6.「朝鮮、満州およびシベリア横断鉄道（ルート 44～49）」、7.「台湾と南西諸島（ルート 50～54）」という順番で、目的地別のルートに説明が加えられている。

このように、日本での生活に関する理解のための実践的、文化的な説明、細かくルートに分けた解説などは先行するマレー社やベデカー社のものと同じ体裁を取っているし、本の大きさや雰囲気もベデカー社のガイドブックに非常に似ているが、記述そのものは日本を理解するためのものというよりも、日本を知る情報を供給するものに近くなっているように感じられる。それは「日本はこれほどに早い変化を遂げているのであるから、年ごとに改訂しなければすぐに古びてしまう」<sup>33</sup> という意識を反映したものでもあるだろう。

テリーのガイドの「前書き」では、執筆者は実地に日本を訪問し、実際に体験したことを書いたという点が強調されているが、この記述を裏から読むならば、このガイドブックは旅行者が旅行者の視点で旅行者のために書いたものだったといえるかも知れない。それは日本と深い関わりを持った日本研究者が心血を注いだ先行する本と同じ体裁でありながらも、目指すところは微妙に異なった、文字通りのガイドブックだった。

また 1914 年（大正 3 年）という出版された時代を反映して、対象が日本の本国から大きく広がり、タイトルが示すように朝鮮、満州、台湾などを含んだ「大日本帝国」全体に及んでいる点にも注意しておく必要があるだろう。ちなみに、マレー社版の最終版となる第 9 版の序でチェンバレンは、「日本のアジア大陸における新たな領土については、言語、習慣などが日本本国とは大きく異なっているので、本書で扱う範囲の中には入れていない」<sup>34</sup> と述べているが、この新たな『日本帝国案内』と後述する『東亜英文旅行案内』では、満州や朝鮮は独立した項目として立てられている。

サトウの『日本旅行案内』を訳した庄田元男は、訳者解説の最後に「時はすでに大正に入っている（大正二年のこと）。妖精のように麗しき古き日本は、もはや遠くの彼方に去ってしまった。[……] 日本は近代化されたのだ。西欧人にとっての古き良き日本の時代は終焉を迎えた。そして、正統派としての『日本旅行案内』の果たすべき役割も漸く終わった。一八八一年から

<sup>33</sup> T. Philip Terry, *Terry's Guide to the Japanese Empire*, Foreword, 1913, v.

<sup>34</sup> B. H. Chamberlain, Preface to the ninth edition, *Collected Works of Basil Hall Chamberlain*, Major Works 8, 前掲書、ページ記載なし。こうした一種の潔さがこの本の魅力でもあり、同時に限界だった。

一九一二年まで、明治から大正にかけて長きにわたり、旅行者に硬派の日本紹介を続けた本書の使命も終了したのである」<sup>35</sup>と書いている。満州、朝鮮から日本、さらに台湾と南西諸島までの広大な範囲を 800 ページほどの小型本に詰め込んだテリー版『日本帝国案内』は文字通り、新しい日本の情報を新たな観光客に紹介する本として登場した、新たなタイプのガイドブックだったのである。

#### 4. 日本人による外国人のためのガイドブック——『東亜英文旅行案内』～外国人に見せたいものは何か

このように外国人が書いた日本のガイドブックがサトウ、チェンバレンの『日本旅行案内』からテリーの『日本帝国案内』へと世代を交代したのと同じ時期に、外国人に向けて日本人が案内書を出すという試みも行われたことは、注目してよいだろう。それが『東亜英文旅行案内 (An Official Guide to Eastern Asia)』である。発行は 1913 年（大正 2 年）から始まり 1917 年（大正 6 年）に全 5 巻<sup>36</sup>として完結している。出版元は日本の鉄道院である。内田宗治はこの 5 巻からなる緻密で壮大な本を後藤新平の大風呂敷の結果だと評しているが、この企画は後述するように 1908 年（明治 41 年）、当時満鉄総裁だった後藤新平がロシアを訪問した際に「英語で書かれた東アジアの完全なる旅行案内書」<sup>37</sup>を日本で作成する約束をしたことから始まったものだった。この本はドイツのベデカー社のガイドブックを模範として、形式もそれまで日本で刊行されていた単なる物見遊山の指南書の域を大きく踏み越えた、本格的なヨーロッパ式の日本旅行案内書だった。

ベデカー社のガイドブックは当時、前述のマレー社のものと人気を二分するもので、ドイツ語版、英語版、フランス語版の三つの言語で刊行されていた点に特色と強みがあった。中川浩一が確認したところによれば、1863 年刊行の「スイス案内」を最初に、1914 年の時点で英語版の「ベデカー旅行案内」は全部で 26 種類あり、その「非対象地域は、サハラ以南のアフリカ、南アメリカ、オセアニアに加えて、朝鮮・日本くらいだったろう」<sup>38</sup>という。内田宗治は、「マレーの旅行案内書シリーズは一九〇〇年代（明治時代後期）に入るところから『ベデカー』にその座を奪われていく。したがって、明治時代前期、欧米人が日本に関する旅行案内を出版

<sup>35</sup> 庄田元男「訳者解説」、前掲書、p. 447-448.

<sup>36</sup> 「満州・朝鮮」、「南西部日本」、「北東部日本」「中国」、「東インド・フィリピン、仏領・蘭領インドシナ、タイ、マレー半島」の全 5 巻である。なお、本書は後の鉄道省である鉄道院が作成したものであることから、official に「公認」という訳語を当て、『公認東亜案内』と訳されることもある。

<sup>37</sup> 内田宗治、『外国人が見た日本』、中公新書、2018、p. 130.

<sup>38</sup> 中川浩一『旅の文化誌—ガイドブックと時刻表と旅行者たち』、伝統と現代社、1979、p. 90.



に対する言及と、その延長上にある「大陸横断」(Trans-Continental)という言葉である。これは、この本が刊行された当時の鉄道事情と密接に関わっていた。つまり、満鉄、東清鉄道、そしてシベリア鉄道を乗り継ぐことで、東アジアとヨーロッパが直接に結ばれたのである。

鉄道を介して、ヨーロッパとアジアが一直線につながるという構想——そうした目で改めて5巻の配列を見ると、第1巻が「満州・朝鮮」に充てられ、その後「南西部日本」、「北東部日本」「中国」、「東インド-フィリピン、仏領・蘭領インドシナ、タイ、マレー半島」と続く順番は、列車でヨーロッパから日本を目指してくる旅行者が通過する経路を反映していることがわかる。これを前述のテリーの『日本帝国案内』の配列(満州・朝鮮は5番目)と比べれば、違いは一目瞭然だろう。老川慶喜によれば、「一九一三(大正二)年六月には、『東京発、パリ行き』の鉄道切符が日本で発売され、運賃は一等料金で四一七円二五銭であった。一六日程度の日数を要したが、船では約五〇日を要したので、かなりの時間短縮となった」<sup>44</sup>ということである。

こうして移動手段の発達によってヨーロッパから東アジアまでをひとつの視野で見渡すことが可能になったこの時期に、日本人によって英語で書かれた外国人向けの最初のガイドブックが刊行されたことに注目した内田宗治は、これらの内容や記述、選ばれたテーマを比較することで、日本人が外国人に「見せたい」と考えたものと、外国人が日本で「見たい」と思ったものの間の差を浮き彫りにするという、非常に興味深い検証を行っている<sup>45</sup>。

内田宗治によれば、日本が外国人に見せたいと考えたものは主として「近代化」されたものに集中している。たとえば、鉄道院の案内が観るべきものとして紹介しながら、テリーの『日本帝国案内』では取り上げられていないものには、「帝国議会議事堂、帝国劇場、慈恵病院、伝染病研究所、天文台、巢鴨精神病院、上野駅、日本ビール醸造所などの近代的施設が多い。こうした施設は日本が欧米に倣って作ったものであり、欧米人がわざわざ日本で見たいと思うものではない。だが日本人としては、科学や文化が欧米並みに発達していることを示したいので、これらを見てほしかった」<sup>46</sup>と指摘している。

一方、テリー版の『日本帝国案内』では、日本の古い情緒が残ったものにも、当然のことながら関心が向けられている。「本文を読み進めると、同書の著者が、とくに江戸時代以来の光景、風俗を求め、それを発見する喜びを読者に伝えたがっていることが感じられる。当時の日本を西欧化の過渡期と捉え、日本の町を歴史的に俯瞰する視点も垣間見える」<sup>47</sup>と内田宗治は指摘する。この点でテリーの『日本帝国案内』は、時代と程度こそ違いはするが、サトウやチェン

<sup>44</sup> 上掲書、p. 188.

<sup>45</sup> 内田宗治、前掲書、第5章を参照のこと。

<sup>46</sup> 上掲書、p. 143.

<sup>47</sup> 上掲書、p. 146.

バレンが敷いた日本についての外国人によるガイドブックの精神を正統に引き継いでいるといえるだろう。

これに対して、『東亜英文旅行案内』は「伝統的なものにほとんどふれていない。情緒に訴えるような記述もない。[……]面白味に欠け報告書のような記述になった一番の理由は、外国人という読者に対しての向き合い方の問題だろう」<sup>48</sup> という指摘のように、外国人の視点よりも、日本人の考えに立って編集されたガイドブックだった。こうした傾向は、このガイドブックが誰に向けて書かれたのかという点以上に、誰が満足するために書かれたのかということのほうが強く出た結果だと考えられる。

さらに、遊郭「吉原」については、『日本帝国案内』では数ページが割かれているのに対して、『東亜英文旅行案内』では場所すら触れられていないという<sup>49</sup>。これを内田宗治は吉原を日本人が見せたくないものと考えたためだとしている。サトウ、チェンバレンのガイドブックでは簡単な紹介がなされているが、実際のところ、外国人の間では吉原は名前が知られた場所だったという。ちなみに、ポール・クローデルは関東大震災（1923年 大正12年）のルポルタージュの中で暗にこの場所に触れて、「浅草の沼地では二千人の女達がじりじりと焼かれていったのである」<sup>50</sup> と報告している。こういった点にはさりげなく、けれども明確に、ガイドブックや日本のことについて書かれた本の中の視点と、その対象に関わる姿勢の差異が浮き彫りにされているといえるだろう<sup>51</sup>。

最後に、一般的な旅行ガイドではないが、箱根宮ノ下の富士屋ホテルが出した『We Japanese』という本について一言、触れておきたい。これはホテルが自主的に出版したもので（支配人の山口正三が発行人）、日本の文化全般についての非常に浩瀚な事典とも呼ぶべき本である。サトウやチェンバレン、あるいはテリーのガイドブックの冒頭に置かれた日本の生活、風習、文化等の紹介に充てられたページを拡張し、充実させたような趣があるが、規模がはるかに大きくなっている。1934年（昭和9年）12月に第1巻が刊行され、次いで1937年（昭和12年）6月に第2巻、1949年（昭和24年）6月に第3巻が刊行されている。3冊を合すると600ペー

<sup>48</sup> 上掲書、p. 147-148.

<sup>49</sup> 上掲書、p. 138-141 を参照のこと。

<sup>50</sup> ポール・クローデル「炎の街を横切って」、『朝日の中の黒い鳥』、前掲書、p. 50。地震の直後に逃亡を防ぐために大門が閉じられ、これによって逃げ遅れた女たちの多くが近くの弁財天池で非業の死を迎えたのである。

<sup>51</sup> 内田宗治はその上で、日本人が西欧人に見せたいと考えたものと、アジア人に見せようとしたものには差があったことを指摘している。さらに同じアジアでも清国から来た人々と朝鮮の人々に対して見せようとしたもの間にも差があった。日本より明らかに歴史のある中国には近代化した模範としての日本、朝鮮に対しては近代化した日本と同時に、歴史ある国としての日本の姿を示そうとしたと、内田は指摘している。それは「同じ東洋でも国や地域により日本が見せたいものは異なった。[……] この時代も観光には、対米感情やアジアの覇権に絡んで政治、外交の要素が色濃く入り込んでいた」ことの反映である。内田宗治、前掲書、p. 157-161.

ジ近い大部の本で、美しい和綴じで造本されている。

第1巻の序文に書かれているように、記述の主なソースはチェンバレンの『日本事物誌』およびジャパン・ツーリスト・ビューロー<sup>52</sup>から出ている月刊誌『Tourist』とNYKの『Travel Bulletin』<sup>53</sup>ということだが、1950年に刊行された版では889の図と共に、日本の風習、習慣、儀礼、祭り、芸術と工芸が、そのほか多数の事物とともに紹介されている。ホテルが独自に出したものであるということで、政治的、経済的な思惑なしに、純粋に日本の事情を紹介したいというホスピタリティと意欲に満ちた冊子として、今日のわたしたちの目にとっても非常に興味深いものとなっている。

## 5. 外国人による日本人のための提言——治癒から治療、そして保養場としての温泉地へ～温泉の利用法の変化

ヨーロッパやアメリカから日本にやってきた人々が驚きの目で見たもののひとつに、入浴の風習があったことは、いろいろな証言が示している。もともと、入浴に対する見方は、日本と欧米社会では明らかに大きく異なっていた。とりわけ、入浴の風習と温泉については、初期の欧米人は大きな驚きとともにレポートを随所で送っている<sup>54</sup>。

『温泉の日本史』の中で石川理夫は「外国人が見た日本の入浴文化と温泉」という項目を立て、中国から派遣された趙秩などの見聞の例から16世紀のポルトガル人船長ジョルジュ・アルヴァレスのレポートといった江戸以前の記録、そして幕末のオランダ商館関係者の温泉記述、さらに19世紀末のイギリス駐日公使オールコックやフランス公使ロッシュといった外交官の温泉訪問までを概括しているが、とくに開国以来の事情として「外国人を驚かせたのは熱い湯と、銭湯や一部の温泉場でのこの混浴だった。以前は湯具着用だったのが、江戸後期の文化爛熟期に手ぬぐいひとつになっていた。欧米人ほど性的象徴とは意識されず、むしろ母性の象徴であった女性の乳房が混浴風呂で露わになっていただけでも、当時禁欲主義的風潮が主流だった欧米人は目を見張ったのである」<sup>55</sup>としている。実際、混浴は当時、ヨーロッパ人たちを当惑させたもののひとつで、たとえばフランスから来日した青年貴族ド・ボーヴォワールは、箱根

<sup>52</sup> ジャパン・ツーリスト・ビューローは1912年に鉄道院の主導で開設された組織で、主な目的は日本に来る外国人の誘致宣伝、情報提供および斡旋だった。ジャパン・ツーリスト・ビューローに関しては、内田宗治の『外国人が見た日本』の第4章および老川慶喜の『鉄道と観光の近現代史』第七章を参照のこと。

<sup>53</sup> 日本郵船（NYK）が顧客などに向けて発行、配布していた英文の情報誌。

<sup>54</sup> 今日でもなお、欧米の人々は日本の入浴、温泉に関わる独自性を認めている。たとえば、ミシュランのグリーンガイドにおいても、「公衆浴場の入り方（usage des bains communs）」と「温泉（Onsen）」といった項目で説明が加えられている。あるいは草津についてのページなどにも、温泉についての解説が見られる。Le Guide Vert, “Japon”, Michelin, 2009, p. 34, 39, 100, 209などを参照のこと。

<sup>55</sup> 石川理夫『温泉の日本史』、中公新書、2018、p. 177。

の宮ノ下での混浴体験を記している。中野明によれば、そのときの情景は以下のようなようだったという。

宮ノ下の温泉に到着したボーヴォワールは、そのとき見た光景を決して忘れないと書く。「夕方に入湯を今しがた終えたばかりの男女の浴客が三百名以上も、アダムとイブの姿そのまま、ゆったりとくつろいでいたのである」[……] ボーヴォワールが幕末に日本にやって来た他の外国人と一線を画するのはここからである。単に日本人の入浴を観察するだけでなく自身も入浴するのである。[……] ボーヴォワールはこの中から自分の入る浴槽を選んで一番ぬるそうな湯につかる。「この透明な湯の小さな世界の中にいたのは六人で、かなりきれいな女性が三人、男性が二人、そしてこのわたし。わたしは、まるで湯沸しの中へとびこんだかのようにであった。一分間で侍徒のように真っ赤になり、ほんとに逃げ出したかった。しかし、わたしの仲間も、男女とも笑いながらおしゃべりを始め、わたしは大したことはわからなかったが、きまり文句で答えるといつもの通り大成功であった」。郷に入っては郷に従えてはいないけれど、西洋人でもボーヴォワールのように抵抗なく混浴に溶け込める人物もいた。なお、『富士屋ホテル八十年史』では、文献に見られるものでこのボーヴォワールの一件が、外国人が箱根で入浴した最も古い例だとしている<sup>56</sup>。

とはいえ、多くの西洋人にとってはこうした状況は日本独特のものであったことも事実で、西歐化を推し進める一方で、混浴の評判が日本を貶めると考えた政府は「改善」に努めた<sup>57</sup>。石川理男は「西洋先進国にならない近代化を進める明治政府にとって、混浴は早急に対応をせまられる問題だった。欧米の目を意識し、政府は内務省・警察主導で明治十二年（一八七九）の東京府湯屋取締規則による『混浴・裸体露出の禁止』を皮切りに、明治三十三年には一般浴場での十二歳以上の男女混浴を禁じた<sup>58</sup>」と指摘している。

その一方で、「公衆浴場は同法第一条で『温湯、潮湯又は温泉その他を使用して、公衆を入浴させる施設をいう』ので、同法の適用を受けない地元住民主体の温泉地の共同湯は例外となる。

<sup>56</sup> 中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか 日本人の羞恥心』、新潮選書、2010、p. 66-67。

<sup>57</sup> たとえば、イザベラ・バードは日光の湯元や青森の黒石近くの下中野で温泉とそこにいる人々を観察しているが、自らは入浴していない。『イザベラ・バードの日本紀行』(上)、第12信、第36信、前掲書、p. 167-168。および p. 470。ちなみにバードは下中野では、「中央の二軒では男女がいっしょに入浴しますが、ぐるりには木の台があって座れるようになっており、男は男ばかり、女は女ばかりに分かれています。[……] わたしはほかと同じく浴場にもきちんとした礼儀正しさが浸透しているのに気づきました。[……] ただし政府は全力をあげてふしだらな入浴を防いでいます。改革がこういった辺地まで達するには時間がかかるかもしれませんが、遅かれ早かれやってくるのはまちがいありません。大衆浴場は日本の特色のひとつです」と記している。

<sup>58</sup> 石川理夫、上掲書、p. 198。

歴史ある温泉地を持つ道県でも条例に微妙な差があり、神奈川県は『十歳以上の男女を混浴させないこと。ただし、知事が利用形態から風紀上支障がないと認める場合は、この限りではない』として、これまでの温泉入浴慣習に配慮している<sup>59</sup>とあるように、それまでの混浴形態を半ば容認する姿勢も見せていることから、混浴禁止が当初は主として欧米人に配慮したものであったことが窺える。

そうした中、日本の入浴に新たな価値と方法を提案したのが、「お雇い外国人」として1876年（明治9年）6月に来日した、ドイツ人医師エルウィン・ベルツだった。来日直後の10月26日の日付を持つ彼の『日記』には、次のような言葉が見つかる。

一体、この国と国民に誠意をよせ、本当に好意をいただいているものは、事実をよく吟味して判断せねばならないのです。健全な批判力の助けをかりないでは、ことにこの場合のように二重に困難な事情のもとで、およそ新しいことがどうして成り立ち得るでしょうか。日本人に対して単に助力するだけでなく、助言もすることこそ、われわれ西洋人教師の本務であると思います。だがそれには、ヨーロッパ文化のあらゆる成果をこの国へもって来て植えつけるのではなく、まず日本文化の所産に属するすべての貴重なものを検討し、これを、あまりに早急に変化した現在と将来の要求に、ことさらゆっくりと、しかも慎重に適応させることが必要です<sup>60</sup>。

こうした姿勢に基づき、「ベルツは古くから日本に伝わるものの価値を見出し、それを積極的に採り上げて宣伝した。その一つに温泉がある。日本の温泉の歴史は古く、江戸時代にも後藤良山がその治療価値を賞揚したが、ベルツは、温泉が日本人の間に長く伝承されてきたのは、そこに必ず医学的効用があるからに違いないという確信を持って調べ始めた。明治十七年（一八八四年）に「持続温浴について」“*Ueber permanente Thermabäder*”と題する論文を『ベルリン臨床医学雑誌』*Berliner Klinische Wochenschrift*, Jg. 21, 1884, Nr. 48（第二十一年）に報告した。これは日本の温泉治療を近代医学の立場で眺めた最初のものといえる。ベルツはたんに温泉医学を推奨するだけでなく、積極的に温泉場の開発にも手を貸した。箱根には公的保養所を作る計画を立て、草津には理想的保養所を作るために土地を購入した<sup>61</sup>と、酒井シヅは書いている。

ちなみに、サトウ編による前述の『日本旅行案内』の「温泉」の項目を執筆したのは、この

---

<sup>59</sup> 上掲書、p. 199.

<sup>60</sup> エルウィン・ベルツ『ベルツの日記』（トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳）（上）、岩波文庫、1979、p. 47.

<sup>61</sup> 酒井シヅ「エルウィン・ベルツのこと」、『ベルツの日記』（上）、上掲書、p. 15.

ベルツである。外国人向けに「日本の入浴と温泉」という項目の下、「熱い湯に注意」としながら、「外国人がよく訪れる日本の入浴場所について、その湯の成分、入浴法そして温泉一般について記しておく。日本人は概して他国の人に比較すると入浴を好む。外国では冷水が用いられるのに対し日本人はとて高温の湯、摂氏三十九度一四十四度に達するお湯に入り、これを初体験する欧米人には著しく我慢できない。しかしすぐにこの『お湯』や『風呂』に慣れて、冬に快適さを感じるのみでなく、夏も気分をさわやかにするものとして好むようになる。だがあらかじめ用心しなければならない点がある。外国人は三十九度以上のお湯に五分以上浸かってはいけない。[……] これらの注意は天然の温泉に入るときにも同様に適用される。日本の温泉のうち一部はとて水質が強く、特に上州の草津、箱根の芦ノ湯、日光近傍の湯元の温泉は理学的な注意を聞かずに入る事は避けるべきである。この他の上州の伊香保や沢渡、小田原付近の湯本、木賀、宮ノ下、そして熱海の各温泉は無害である」<sup>62</sup>と書いている。ベルツの個人的な体験と医者としての知見の双方が投影された、簡素ながらも行き届いた解説だといえる。

ベルツは1880年(明治13年)に『日本鉱泉論』<sup>63</sup>を著わし、「日本ノ天然鉱泉ヲ有スル其数甚タ多ク独逸奥国ヲ除クノ他外国ノ及バザル所ナリ而シテ其鉱泉タルヤ古来邦人ノ属目スル所ニシテ各種患者ノ之ニ浴治シ来レルハ幾百年ナルヲ知ルベカラズ真ニ是造化ノ賜物ト謂フベシ」として、内務省に対してこうした歴史的資源を活用する必要性を提言している。さらに「ベルツは各地の温泉地を衛生的な観点で改革し、箱根や草津、伊香保などには、西洋医学を取り入れた温泉治療所を建設してはどうか」<sup>64</sup>という提案までしている。

日本でも、たとえば黒田藩の典医ですぐれた儒者でもあった貝原益軒(1630-1714)は、すでに『養生訓』の巻第五の中で「湯浴み」と「温泉」の効用について記していた<sup>65</sup>が、ベルツの建白書は西洋医学の見地からの提言であり、治癒を目的とした湯治から明らかに治療行為を見据えたものとなっている点で、それまでのものとは一線を画したものだといえる。とくにベルツのものは温泉が含む成分についての調査を基にその効能を論じている点で、後の温泉案内に大きな影響を与えたと考えられる。

さらに、ベルツが提案した視点の独自性は、こうした効用を説くだけでなく、それをいかに利用すべきかを、施設などの整備の面から説き起こした点にあるといえるだろう。『日本鉱泉論』の中で、「入浴回数多き、入浴時間の長さなど日本人の入浴偏重ぶりを危惧したベルツは、飲

<sup>62</sup> アーネスト・サトウ編著『明治日本旅行案内』上巻カルチャー編(庄田元男訳)、平凡社、1996、p. 33-34。

<sup>63</sup> ベルツは温泉を「鉱泉」としている。なお、このテキストは全文が国立国会図書館のデジタルアーカイブで閲覧できる。本稿での引用はこのデジタルアーカイブからのものである。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/831485>

<sup>64</sup> 富田昭次、前掲書、p. 159。

<sup>65</sup> 貝原益軒『養生集・和俗童子訓』、岩波文庫、1961、p. 111-115を参照のこと。

泉療法の必要性と、温泉の効用には温泉成分のみならず温泉地の気候、日射や乾燥度、高度など環境条件、温泉医の関与の重要性を指摘し、その観点から理想的な環境条件を備えた温泉地計画の必要性を説いた<sup>66</sup>のである。続いて彼は伊香保と熱海を主に、計画の条件を検討しているが、そこで必要としているのが、衛生面での整備、宿泊および療養設備、道路等のアクセス面での整備であり、ベルツが本格的な療養施設を目指していることが明確にわかる。

実際、この後にベルツは1887年(明治20年)に「皇国の規範となるべき一大温泉場設立意見書」を宮内庁に出し、自らその開設に向けて動き出す。このときにベルツが選んだのは箱根の大涌谷の西北崖で、「その一大温泉場とは、発汗浴、冷水浴など温度の異なる浴槽のほか、痔疾を治すための鯨噴浴まで設け、ホテルを付帯させて、そのなかには体操室や談話室、囲碁・将棋・撞球などを用意した娯楽室を備えたもの。入浴や運動の方法は、すべて正規の医学教科を経た医師が指示を出し、マッサージも医学的に養成された担当者が施すというドイツ式の本格的なクアハウスホテル<sup>67</sup>だった。ただ、この壮大な計画は土地の購入までは進むものの、最終的に実現することはなかった。

老川慶喜は観光地理学者の山村順次の整理に沿いながら、「温泉地の発達過程は、一般に①病氣治療を第一の目的とした療養温泉地(湯治場)、②病氣予防・健康保持を目的とするが、レクリエーションの場としての機能をあわせもつ保養温泉地、③観光レクリエーション活動の宿泊基地としての性格を強くもち、療養・保養温泉地に比べ、温泉そのものの意義は二次的なものとなる『観光温泉地』という段階をたどる<sup>68</sup>としているが、この分類に従うならば、ベルツが提案したのはまさに①療養温泉地から②保養温泉地のレベルへの移行だったといえるだろう。ベルツは箱根の計画が不首尾に終わった後の1904年(明治37年)9月に草津を訪れた際、『日記』にこう記している。

まったく神秘的な草津温泉の効能を、最も適切に表わしているのは、日本の有名な小うた「お医者さまでも草津の湯でも、恋の病はなおりやせぬ」である。普通あれほどの難症の癩病ですら、往々にして全治することがあり、少くともたいていは快方に向うのを常とする。[……]草津には、無比の温泉以外に、日本で最上の山の空気と、まったく理想的な飲料水がある。こんな土地が、もしヨーロッパにあったとしたら、カルルスバードよりもにぎわうことだろう。[……]おまけに西洋人を驚かせるのは、まるでエデンの園のように羞恥心のないことだ！ここ数年来は、男女別の入浴が行われるようになり、今では、男女

---

<sup>66</sup> 石川理男、前掲書、p. 196.

<sup>67</sup> 富田昭次、前掲書、p. 161-162.

<sup>68</sup> 老川慶喜、前掲書、p. 61-62.

共に素裸で往来を歩くものを、ほとんど見かけないが、昔は、それが当り前のことだった。そこでまず、新しい草津を、今の町の外に作る必要がある。それには、好適の場所がたくさんあるし、湯も、毎日数千の個別浴に十分な程度に得られる。来年帰国するのでなければ、自身で療養所を建てるのだが。この温泉の特異な効力が知れわたれば、あらゆる国の人々がやって来ることは確実だ<sup>69</sup>。

ここには、ベルツが一貫して日本の温泉を利用して作り上げようとした理想の施設がはっきりと描き出されている。

②から③への移行は、これから後、日本人の手によって推し進められることになる。すなわち、明治後半から次々に刊行されていく「温泉案内」の類では、ベルツが提案したような要素を紹介しつつ、温泉の効能とアクセスの利便性に応じた温泉利用が薦められている。その一方で、それらの案内書の中で紹介されている温泉は、「温泉国といわれる日本では、古くから温泉が湯治に使われてきたが、そこでは長期療養が普通だった」<sup>70</sup> 状況から、ごく短期、場合によっては日帰りで見学を楽しむことのできる行楽地<sup>71</sup>へと姿を変えていくのである。

## 6. 日本人の書いた日本人のための案内書——交通手段の進展と観光地の成立～新しいスタイルの定着

ここまで、外国人が外国人に向けて、あるいは日本人に向けて出したガイドブックや提案、そして日本人が外国人に対して発信した日本の情報を見てきた。最後に、日本人に向けて日本で出版されたガイドブックを検証しておきたい。

もともと、日本では道中記のようなものが数多く出版されていて、アーネスト・サトウはそれらに注目していた<sup>72</sup>。また、紀行文も数多く読まれていた。さらに、江戸時代から「名所図会」が常に人気を博してきたことは、いろいろな場面で紹介されている。とくに鳥瞰図をベースにした名所図会は根強い人気を誇っていて、1921年（大正10年）に鉄道省が刊行した『鉄道旅行案内』にも吉田初三郎（1884-1955）が描いたものが入っているが、吉田は当時「パノラマ地図」と呼ばれた鳥瞰図の第一人者として名声を博していた。

ただ、そうした読み物や絵による地図から得た知識を自ら移動して実践していく移動が大衆的な規模にまで広がっていくのは、やはり交通手段の発達を待つ必要があったことはいうまで

<sup>69</sup> ベルツ『ベルツの日記』（トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳）（下）、岩波文庫、1979、p. 178-180。

<sup>70</sup> 富田昭次、前掲書、p. 142。

<sup>71</sup> 老川慶喜、前掲書、第六章「日帰りの『行楽』」を参照のこと。

<sup>72</sup> アーネスト・サトウ『明治日本旅行案内』（下）の庄田元男による訳者解説、p. 433を参照のこと。

もない。老川慶喜は柳田國男（1875-1962）の言葉を引きながら、「鉄道の利用者には『汽車が無かったら、どれほど難儀をしてあるいて居たろうと思ふ人』と、『汽車が通じたから出て来たといふ人』の二つのタイプがあるという。そして後者のタイプの方がはるかに多く、鉄道が開通すると人びとは『釣り出されて遊覧の客となった』と述べている。鉄道の開通が、多くの人を旅に誘うことになったのである」<sup>73</sup>としている。

こうして、1883年（明治16年）には『大日本道中記大全 駅通明鑑 旅行必携』（岡大次郎編、求古堂刊）が出され、1895年（明治28年）には野崎左文の『全国鉄道名所案内』が巖々堂から出版されている。この『全国鉄道名所案内』で冒頭に著者が「明治五年東京横浜の間に始めて汽車運輸の道を開きしより以来目下全国既成の鉄道線路は殆んど二千哩の長さに達し軌道の通過する所実に山城、大和、河内〔……〕石狩、胆振の四十ヶ国に涉り猶ほ本年帝国議会の協賛を経、鉄道庁に於いて布設せんとする第一期鉄道線、並に各私鉄鉄道会社に於て仮免状を下付せられ測量若くは工事中のものを合すれば其の延長殆んど四五千哩に及ばんとす亦熾なりと謂うべし」<sup>74</sup>と書く通り、鉄道の発達は急ピッチで行われ、利用者も増えていったことがわかる。

さらに1909年（明治42年）に『鉄道院線沿道遊覧地案内』（鉄道院）が刊行され、続けて1913年（大正2年）には同様の『鉄道沿線遊覧地案内』<sup>75</sup>が、同じく鉄道院から刊行されている。この『鉄道沿線遊覧地案内』では、目次に沿線各地それぞれの見どころとして「都市名邑」、「神社」、「仏閣」、「名所旧跡」、「公園」、「避暑避寒地（温泉・海水浴場）」、「山嶽」、「瀑布」、「河湖」の推奨すべき場所の紹介がなされているが、これは後の「日本八景」選定などに繋がっていくものだといえるだろう。

また、末尾に付録として貝原益軒の「旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄭客をあらひすゝぐ助となれり、是も亦、我が徳をすゝめ、知をひろむるよすがなるべし」<sup>76</sup>という言葉に続けて、「廻遊旅行の栞」として「この一章には大方の旅行を計画せらるゝ参考にもと、一週日内外にて巡遊し得べき各方面の名勝地を列記せり」<sup>77</sup>として、「三浦半島廻り」から「伊勢参宮」など、各地の見所を巡るルートが紹介され、本のタイトルにふさわしい締めくくりとなっている。

関戸明子によれば、温泉旅行の大衆化は「鉄道院によって『鉄道院線沿道遊覧地案内』が出

---

<sup>73</sup> 老川慶喜、前掲書、p. 13-14.

<sup>74</sup> 『全国鉄道名所案内 上編・下編』 シリーズ 明治・大正の旅行7 監修・解説 荒山正彦、ゆまに書房、2014、p. 41-42.

<sup>75</sup> この『鉄道沿線遊覧地案内』では、すでに附録として朝鮮、南満州、台湾の項目が加えられている。

<sup>76</sup> 『鉄道沿線遊覧地案内』、1913、ページ記載なし

<sup>77</sup> 上掲書、付録 p(1)・p(8).

版される以前にも、さまざまな『漫遊案内』や『旅行案内』の存在を確認できる。こうした出版物が目立つようになるのは明治三〇年代である。五井信は、この時代の特徴を、ガイドブックを持って出かけ、各地でさまざまなことを学ぶ読者／旅人の姿にみることができるという（「書を持って、旅に出よう」）<sup>78</sup> という下地があり、明治末から大正期に鉄道網が整備されることによって一気に進展することになる。ちなみに、関戸明子が参照している五井信の論考の副題は文字通り、「明治 30 年代の旅と<ガイドブック><紀行文>」である。

上高地を《再発見》したことで知られるイギリス人宣教師ウォルター・ウェストン (Walter Weston, 1861-1940) が『日本アルプス』(*Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*, 1896) の中で、「もう一度本国へ帰って、『日本に鉄道がありますか』という質問を耳にすると、奇妙な気持がする。なぜなら、こうした質問に十度も返答をした後、つい先日、駐英日本総領事の林権助氏が親切にも、日本の汽車汽船の旅行について興味深く書いた一冊の案内書を寄贈してくれたからである。その案内書には、一八九五年の終りに、二十九の会社に分担されて、延長三六一九キロにもおよぶ鉄道が開通していると述べてあった」<sup>79</sup> と書いているように、1890 年代後半から日本の鉄道網は急速に整備されていった。

また、移動の簡便化に伴う逗留のスタイルの変化も、見落とすことはできないだろう。この点については、内湯と外湯をめぐる権利の問題と、一日ないし数日だけの逗留を認めるかどうかという問題が関係していた。関戸明子は「療養・保養温泉地が観光地化する直接の契機について、山村順次は、交通機関の整備によって短期滞在観光客が多数来湯することにあると指摘する。それにともない、宿泊形態が自炊・半自炊から賄付へ、滞在の短期化、客層が固定客から不特定多数の客へ、入湯圏の広域化、宿泊料金の上昇などが生じ、温泉の利用も外湯（共同浴場）から内湯（旅館内の浴場）へと移行していく（『新観光地理学』一九九五年）」<sup>80</sup> としている。

1917 年（大正 6 年）に誠文堂から出された『日本温泉案内』はまたたくまに版を重ねてベストセラーとなった本だが、その「はしがき」では、刊行の目的は次のように記されている。

『命あつて 物種といふから、一つ温泉へでも……。』と言った調子で飛び出すにして、サテ愈々となると、『何所にしようか。』と来る。何所にしようか、之が実際大問題だ。何しろ日本全国には、一千以上の温泉場があるのだから、迎も素人眼には差別が附かない。ト言つて何所でも宜いとは猶更行かないから、何うしても之を解決すべき師友的良書が必要だ。が、従来其様な良書があつたであらうか。曰く無かつた！。之れが本書刊行の理由

<sup>78</sup> 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』、ナカニシヤ出版、2007、p. 79.

<sup>79</sup> ウォルター・ウェストン『日本アルプス』（岡村精一郎訳）、平凡社ライブラリー、1995、p.33-34.

<sup>80</sup> 関戸明子、前掲書、p. 107.

で、此の必要に応ずる為に、本社は多大の努力を以つて所謂温泉なるもの、具体的調査を遂行したのであつて、此の一本を繙くと同時に、殆ど身を実境に処するの思あらしめ、且何人の説明なしにも、充分に其の性質特効利害を知了することは出来るのである<sup>81</sup>。

こうした編集者の緒言は、文字通り「滞在の短期化、客層が固定客から不特定多数の客へ、入湯圏の広域化」を裏付けるものとして読むことができる。

あるいは、1920年（大正9年）に鉄道院から出された『温泉案内』の「例言」では、「本書は鉄道によって、沿線附近の温泉に遊ぼうとする人の為に、其の旅行計画の参考に供しようと思つて発行したものである」<sup>82</sup>とした上で、「嘗て雑誌『実業之日本』に掲載された石津稟学博士の温泉療養に関する談話は、一般浴泉者にとつて有益な参考となるべきものと信じ、巻末に転載した」<sup>83</sup>とあるように、行き先の温泉を選択する際の基準に、湯の入り方や成分と効能などを重視している。

ちなみに、この本は出版元が鉄道院であることから、温泉の分類は路線ごとになっていて、「東海道線」、「中央線」、「関西線」、「北陸線」、「山陽線、讃岐線」、「山陰線」、九州各線（鹿児島線、宮崎線、川内線、豊洲線、長崎線）、「総武線」、「信越線」、「磐越船」、「奥羽線」、「陸羽線」、「北海道各線」の順に、350ほどの温泉地が紹介されている。それぞれの温泉について位置、温度、湯の質、効能、さらに簡単な見どころの紹介などが手際よく紹介され、場所によっては宿、その地まつわる伝説も添えられているが、「例言」に「鉄道から余りに離れた温泉、旅館設備の無い温泉、一般湯治者に関係の薄い温泉場などは、書き洩らしたのも多い」<sup>84</sup>とあるように、この本もやはり、人々の温泉利用の形態の変化に則した出版物であることが分かる。また、鉄道院の本らしく、巻末には「主要温泉交通時間賃金表」が添えられていて、それによれば、たとえば東京を起点とした場合に「箱根・湯河原・熱海・伊東」は国府津で下車するが、距離は「四八、二哩」、所用時間は特急で「一、三〇時間」、普通で「二、〇〇時間」、運賃が「一等 三、六九円 二等 二、四六円 三等 一、二三円」<sup>85</sup>である。

<sup>81</sup> 宇野富夫『保養遊覧 日本温泉案内』、博文堂、1917年、ページ記載なし

<sup>82</sup> 鉄道院『温泉案内』、博文館、1920年、ページ記載なし

<sup>83</sup> 上掲書、ページ記載なし

<sup>84</sup> 上掲書、ページ記載なし

<sup>85</sup> 上掲書、p. 455。なお、鉄道院は1922年（大正12年）に英語による温泉案内を刊行している。この本では1. 序論、2. 日本の地理、3. 火山、4. 鉱泉、5. 鉱泉の効用、6. 種別、7. 放射能泉、8. 入浴法の区分、9. 日本の宿、10. 主要都市近辺の温泉リゾートの順に紹介したあと、具体的に北日本の温泉（箱根、伊豆、信越線、中央線、北陸線、東北線、陸羽線、奥羽線の各沿線、北海道）、南日本の温泉（関西、山陽線、山陰線の各沿線、四国、九州）、朝鮮の温泉、南満州の温泉、台湾の温泉について、地図や写真を添えながら案内したあと、他国のベルギーやフランス、ドイツからアフリカ、インド、ニュージーランドなどの温泉についてもページを割いている。Cf. *The Hot Spring of Japan (and the principal cold spring) including Chosen (Korea) Taiwan (Formosa) South Manchuria, Japanese Government Railways, 1922.*

昭和になると観光はさらに重要な要因として、脚光を浴びるようになる。とくに汽車・汽船という交通手段に加え、自動車の普及が人々の移動を支え始めたことは、旅行の可能性をさらに押し広げることになった。自動車の普及に関していえば、1908年（明治41年）のフォードT型発売<sup>86</sup>が大きな契機となり、1922年（大正11年）にはシトロエン5CVが登場するなど、急速に人々の生活の中に自動車が入ってきている<sup>87</sup>。日本の自動車登録数は1923年（大正12年）に15,731台、1924年（大正13年）は24,333台、1925年（大正14年）29,164台、そして1926年（大正15年、昭和元年）が40,070台、1927年（昭和2年）には51,762と、毎年、急激な増加<sup>88</sup>をし、公共の交通手段としては、1912年（明治45年、大正元年）に最初のタクシー会社（フォードT型6台）が登場し、1924年（大正13年）には大阪にいわゆる円タクが登場している<sup>89</sup>。

ちなみに、今日、ミシュラン・ガイドの発行元として名高いフランスのタイヤメーカーのミシュラン社が自動車の普及のために旅行ガイドをドライバーに配り始めたのは、1900年のことである。こうした流れに沿って、ベデカー社のガイドブックも鉄道利用者から次第に自動車を使う旅行者向けにスタイルを変えていったと、中川浩一は指摘している<sup>90</sup>。また、上述の駐日フランス大使ポール・クローデルも本国からルノーなどを輸入し、自らその宣伝に努めている。1926年（大正15年）に彼が別府を再度訪問した際には、油屋熊八はこの温泉地に2台あった車で詩人大使を近隣の景勝地に案内して廻り、大変に感激されたという。

この時代に行われた日本人に向けた観光地の売り込みのひとつの結実は、1927年（昭和2年）の「日本八景」制定だろう。これは中国の瀟湘八景に倣い、日本の代表的な景観と観光地を選ぶもので、大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が共同で、鉄道省の後援の下に行われた。すでにある日本三景や富士山、さらに人の手で作られたもの（錦帯橋など）を外し、瀑布、溪谷、海岸、河川、温泉、山岳、湖沼、平原の8部門において、投票数と選考委員の見解とを合せる形で選定が行われた。その結果、瀑布：華厳の滝／溪谷：上高地／海岸：室戸岬／河川：木曾川／温泉：別府／山岳：温泉（雲仙）岳／湖沼：十和田湖／平原：狩勝峠がそれぞれ選ばれた。人々の関心は高く、日本の当時の総人口の1.5倍にあたる9,348万票余が投票されたとされるが、このことはとりもなおさず、この時代の観光に対する日本人の関心の高さを物語っている。と同時に、瀑布や山岳など他の7部門が自然の景観であるのに対して、温泉だけがニュアンス

<sup>86</sup> フォードT型に関しては、折口透『自動車の世紀』、岩波新書、1997、p. 60-67を参照のこと。

<sup>87</sup> シトロエン5CVに関しては、上掲書のp. 107-110を参照のこと。

<sup>88</sup> 尾崎正久『日本自動車史』、自由研究社、1942、p. 7を参照のこと。

<sup>89</sup> タクシーに関しては、佐々木烈『日本のタクシー自動車史』三樹書房、2017に詳しい。また円タクの普及については、齋藤俊彦『くるまたちの社会史』、中公新書、p. 156-159を参照のこと。

<sup>90</sup> 中川浩一、前掲書、p. 120-136。

が異なることから、この時代にすでに温泉が治癒、治療とは別の目的を担うものとして人々から認知されていたことがうかがえるだろう。

主催した新聞社はその後、8人の文人にそれぞれの景勝地に関わる紀行文を依頼し、それを一冊にまとめて出版<sup>91</sup>しているが（華厳の滝：幸田露伴／上高地：吉田絃二郎／狩勝峠：河東碧梧桐／室戸岬：田山花袋／木曾川：北原白秋／別府：高浜虚子／温泉（雲仙）岳：菊池幽芳／十和田湖：泉鏡花）、この中には当時の観光の形態の変化を因らずも反映したのものが見つかる。たとえば別府を訪れた高浜虚子（1874-1959）は、地獄廻りに出発して海岸通りを北に自動車で行った際に道路の広さと新しさに気づき、それが1920年（大正10年）に作られた八間幅の道路だと教えられて、「この前、日名子氏に案内されて地獄廻りをした時は、人力車でなければ通れなかった。所によると徒歩でなければ通れなかった。それも、朝出掛けて遂に鉄輪温泉に一泊して、二日がかりであったことを思うと、夕方の五時頃から涼みがてらに自動車に乗って出掛けるなんか、随分変化したものと思った」<sup>92</sup>と書いているが、これなどはそのまま別府が便利な観光地となったことを喧伝する効果も持っていたと考えられる。

あるいは、室戸岬を担当した田山花袋（1872-1930）は、その冒頭で「宇多の松原に行って私達ははじめて自動車を下りた。それにしても何という滑らかな愉快的疾走であったろう。それはとても関東などでは想像だも出来ないような立派なドライブ・ロードである。[……]海に出たと思うと、そこに明媚な松原があつたり[……]、出来てまだいくらかも経たないような旅舎や料理屋がそこそこに沢山に点綴された。さっきの汽車はそこまで来て、ここを一時的終端駅としている。つまりここがこうして開けたのもその交通によるものだということがそれとうなづかれる。[……]手結の浜。手結の山。それを越えて行った時の感じは、長い後までも忘れられないであろう。[……]昔は道がもっと上の方にあつたので、そこから今の新道に移したのだそうだけれども、兎に角あの江藤新平が阿波境の甲浦でつかまって、それから野根山を越して高知に護送される時に休んだという焼餅屋、その婆アさんがいまだに生きていて、その時の話をするというのもなつかしかった。[……]しかし自動車はそうした時代おくれの光景には目もくれないというようにしてただまっしぐらに走った」<sup>93</sup>という文章で、鉄道、さらに自動車による観光化とその発達を的確に書き記している。

ちなみに、『蒲団』（1907）などの作品で知られる田山花袋は日本文学史では一般的に「自然主義作家」というカテゴリーに入れられるが、博文館に入社して1903年（明治36年）から『大日本地誌』の編集に携わった経歴を持っていた。また彼は大変な健脚で、日本各地の温泉

<sup>91</sup> 経緯に関しては、幸田露伴ほか『日本八景 八大家執筆』、平凡社ライブラリー、2005を参照のこと

<sup>92</sup> 高浜虚子「別府」、『日本八景』、上掲書、p. 166.

<sup>93</sup> 田山花袋「室戸岬」、『日本八景』、上掲書、p. 82-85.

を自分の足で廻った一種の紀行文集である『温泉めぐり』（1918年）は当時のベストセラーになっているが、この点でも「日本八景」の執筆者にふさわしい作家だったといえるだろう。

## 7. ふたたび、クローデルと日本～1898年から1921年へ——むすびに代えて

クローデルの最初の日本周遊（1898年）と大使としての日本滞在（1921年から1927年）の間にはおよそ20年の落差があったが、この時間は日本人とその社会にとって、きわめて変化の大きな時期だったといえるだろう。この間に日本は日露戦争に勝利し、韓国を併合し、中国に進出し、第一次世界大戦にも戦勝国として名を連ねることになった。大正末に横浜港に降り立った詩人大使の目には、新たな日本はどのように映ただろうか？ 本稿の冒頭で引用した「そこにあるユニークさを見分けることができるのは外国人だけなのです」と語った講演の最後に、クローデルはこう訴えかけている。

人間と自然との間にこれほど密接な理解が存在し、これほど明瞭にお互いがお互いの刻印を宿し合っている国はありません。二世紀の間、日本人と自然はただ互いに見つめあうことだけしかしなかったのです。この和合がいつまでも続き、それが他の国の人々に対してもつ教訓が絶えることのないように、という私の祈りを表明することをお許してください。そして、それを背負い込むこの国とはもともと何の関係もない、異質で陳腐な建物が侵入してきて、ちょうど奴隷や地獄に落ちた者の吠える声のように、この魔法の島々の音楽を攪乱することがありませんように<sup>94</sup>。

クローデルが日本に求めたものは、当時の日本人にとってはどういったものだったのだろうか？ それはむしろ破棄したいものだったのだろうか？あるいはクローデルが日本に見たものは、日本人が見てほしくないものだったのだろうか？ それでは、日本人はクローデルに何を見て欲しかったのか？

こうした問いに答えるひとつのヒントとなる指標が、詩人大使が日本で発表した舞踊劇『女と影』（*La Femme et son ombre*, 1923）をめぐる批評である。これは坪内逍遙の『新楽劇論』（1904）に影響を受けて日本の革新的な舞踊家たちが試みた新舞踊のための作品で、五世中村福助（1900-1933）が率いる「羽衣会」の依頼を受けて、世界的詩人と評判の高かった詩人大使クローデルが書き下ろした作品だった。その成立経緯や位置づけについては中條忍の論考<sup>95</sup>や

<sup>94</sup> ポール・クローデル、前掲書、p. 40.

<sup>95</sup> 中條忍「クローデルと日本——『女とその影』に落ちた日本の影」、『文学』57号、岩波書店、1989およ

拙論<sup>96</sup>に詳しいが、この舞踊劇（mimo-drame）は1923年3月に帝国劇場で初演された。

作品は極めて単純な構造で、いにしへのどこともわからない場所に武士（松本幸四郎）が従者を連れて登場する。そこに死んだ彼の前妻の亡霊と思われる存在（中村芝鶴）が姿を見せる。遅れて武士の現在の妻（中村福助）が現われ、夫が見たものは幻だと取り合わない。再び前妻が姿を見せると、武士は刀で切りつける。ところが、声を上げて倒れたのは現在の妻の方で、後には前妻の笑い声だけが響いている。

今日目から見れば、紗幕を使用した幻想的な舞台空間や、音楽を担当した五世杵屋佐吉の果敢な試み（邦楽器によるオーケストラ演奏）など、1920年代の文化交流の情勢を反映したものだと言評することもできるが、当時は「さて、蓋をあけてみてからの『女と影』の評判だが、これは正直に言って毀誉褒貶相半ばしたと言ったら当たっているだろう」<sup>97</sup> というものだった。それは「高名な詩人大使が、来日後、初めて書き下ろした舞台作品とあってか、『女とその影』の入りはよかった。[……]しかし、当時の劇評を見ると、かならずしも好意的ではなく、むしろ酷評に近いものが多い。日本かぶれした外国人の書いた、ちゃちな和風舞踊劇というのが、評者のおよそ共通した意見であった」<sup>98</sup> ということだが、実際、酷評を代表するものとして正宗白鳥が評したものを見てみると、「クロオデル君は、武士と三味線を取り入れたら何でも詩になると思っているものであろうか」<sup>99</sup> という、かなり手厳しいものだった。

また評論家の町田博三は、「社会的にも芸術的にも醜態を極めたのはクローデル氏の『影と女』（ママ）とか言う舞踊である。クローデル氏は世界的文豪か知れないが所詮は一個の観光客に過ぎない、武士の妻が乗り物で来て、真夜中往来で三味線を弾かせることの不自然さがお気がつかれぬ程度に日本の事情に暗い方である」<sup>100</sup> と、これも厳しい口調の劇評を書いている。ここに投影されているのは、西歐人に日本がどのように見られているのかという面に向けられた日本人の意識であり、文字通り、「見せたい日本」——欧米にひけをとらない近代国家日本——をクローデルが観ていないことへの苛立ちに他ならない。この意味で、サトウやチェンバレンのガイドブックからテリーのもの、さらに『東亜英文案内』といった本の背後で形を変えつつ常に深く刻み込まれていた「見せたい日本」と「見たい日本」の間の溝は、クローデルが日本に到着した1920年代にもまだ、脈々と繋がっていたのだといえるだろう。批判をする人たちは「外国人の目」を、日本を示すためのバロメーターとして使用しようとしているが、そのメー

び『ポール・クローデルの日本』、法政大学出版局、2018。

<sup>96</sup> 根岸徹郎「ポール・クローデルの『女と影』と日本」、『演劇のジャポニスム』、森話社、2017。

<sup>97</sup> 山内義雄『『女と影』前後——記録風に』、『日仏文化』23号、1968年、p. 19。

<sup>98</sup> 中條忍「クローデルと日本——『女とその影』に落ちた日本の影」、『文学』57号、岩波書店、1989、p. 99。

<sup>99</sup> 正宗白鳥『『女と影』を評す』（下）、『時事新報』、1923年3月4日

<sup>100</sup> 町田博三「羽衣会を観ての感想」、『新演芸』5月号、1923。

ターにメモリを付けたのが実は自分たち自身であることを、正宗白鳥たちは忘れてしまっているようにも見える。

1876年（明治9年）に来日したばかりのベルツは、『日記』に「ところが——なんと不思議なことには——現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。『いや、何もかもすっかり野蛮なものでした〔言葉そのまま！〕とわたしに言明したものがあろうかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと『われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からやっと始まるのです』と断言しました」<sup>101</sup>と書き記している。こうした状況と心情は、クローデルの『女と影』に対する日本人の反応が図らずも浮き彫りにしてくれたように、物質的に近代化された大正時代まで実は綿々と続いていっただけか、逆に本稿で言及した『東亜英文旅行案内』の一種偏った記述が示していたように、人々の心の中では近代化に反比例するように、むしろ根底では強くなってきていたといえるのかもしれない。

逆に、日本政府が忌み嫌い禁止しようとした明治初期の混浴やあからさまな裸体に対して、寛大な意識を持った西欧人もいた。そのひとりが、パリのギメ美術館の基礎を作ったことで知られるフランスの実業家で、東洋美術の蒐集家だったエミール・ギメ（Émile Guimet, 1836-1918）である。中野明は「ギメも日本人の習慣を容認する。そして、強い口調で次のように言う。『私ははっきりと言う。羞恥心は一つの悪習である、と。日本人はそれを持っていなかった。私たちはそれを彼らに与えるのだ』。ギメの予言も見事的中する」<sup>102</sup>と指摘しているが、このギメの言葉は、二つの文化が接触した際に生じる軋轢において、少なくとも価値の優劣はないという判断の重要性を、わたしたちに教えてくれている。ここからは、この稀代のコレクターの東洋の文化に対する根本的な姿勢が透けて見えてくるようにも感じられる。

その一方で、ベルツが先鞭をつけて示した西洋医学的な温泉療法や保養の考えを、日本人は見事に自分たちのスタイルで昇華し、自らの生活の中で取り込んでいる。明治末から大正にかけての数々の旅行、温泉案内書の氾濫は、交通手段の発展と相俟って、そうした人々の受容のひとつの表れとして捉えることができるだろう。それは「外国人の目」を借りることで自国のことを深く知り、改めて別の角度から享受することができた喜びと人々の逞しさの表現といえるかも知れない。ある意味で、外国人が《発見》したものを日本人が《再発見》することによっていっそうの発展を遂げたものの代表が、行楽旅行と温泉保養地なのである。こうした流れの明確な表れのひとつが、本稿でも取り上げた「日本八景」の制定であろう。

人が自分の住む場所を離れ、移動することが前提である旅行、そしてそのために作られたガ

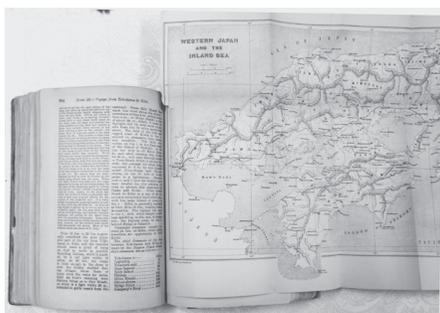
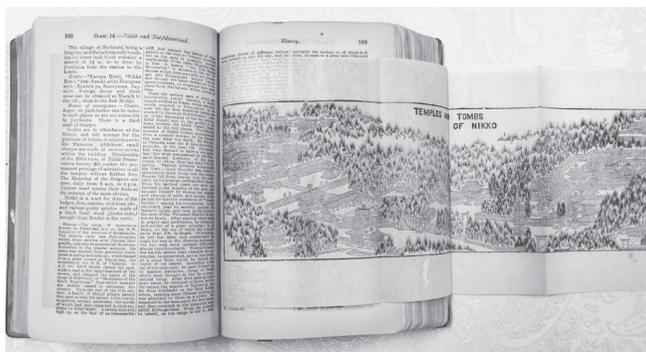
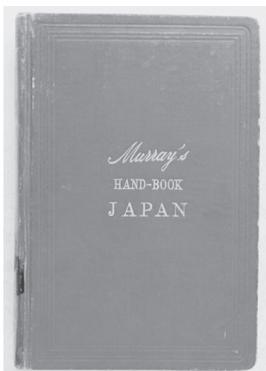
<sup>101</sup> エルウィン・ベルツ、『ベルツの日記』（上）、前掲書、p. 47.

<sup>102</sup> 中野明、前掲書、p. 124.

イドブックは、まさに人間が触れあう際の《発見》と深くかかわるものである。そして文化と文化、人と人の交流、さらには対等な交流ではなく、場合によってはあくまでも一過性の触れあいを基盤にした上での、お互いにとっての「見て欲しいもの」と「見たいもの」、さらに「見て欲しくないもの」の複雑な交差を反映する、貴重な資料の役目を果たしているといえるだろう。

1.

クローデルが1898年（明治31年）の最初の日本訪問の際に参照した、バジル・ホール・チェンバレンのマレー社『日本旅行案内』第4版。初版（1881年 明治14年）と第2版（1884年 明治17年）を編集したのはアーネスト・サトウ。1891年（明治24年）の第3版からチェンバレンとメーソンが編著を担当している。折り込み地図や時刻表などの情報が詳細に載っていて、当時、日本を訪れる外国人にとっては必携の書だった。写真は日光と瀬戸内を中心とした西日本を紹介したページ。



2.

ベデカー社のガイドブック。赤い表紙で小型版ポケットサイズが特徴。詳細な地図と図版の多さが売り物だった。写真は1920年代のもので、それぞれ英語版(左)とドイツ語版(右)。サトウ、チェンバレンたちによるマレー社のガイドブックよりも一回り小さい。写真はドレスデンを紹介したドイツ語版の地図と案内のページ。



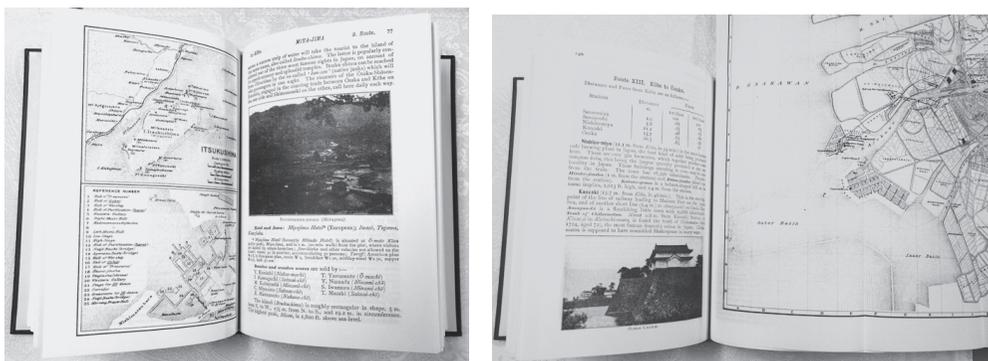
3.

『テリーの日本帝国内 朝鮮、台湾を含む』 写真は1930年(昭和5年)の増補版。初版は1914年(大正3年)に刊行。小型のポケットサイズで、地図や図版などを多用している点でも、また色と形もベデカー社のガイドブックに非常に似ている。大きさはベデカー社のものとほぼ同じである。



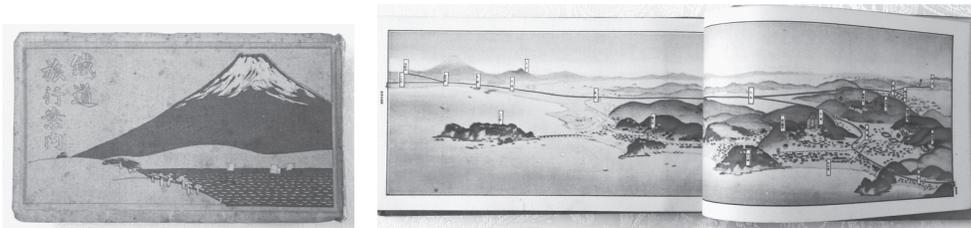
4.

『東亜英文旅行案内』。1913年（大正2年）から1917年（大正6年）に刊行。写真は復刻版のもの。日本の鉄道院が出した、英語による本格的なガイドブック。図版などはベデカー社のものよりも優れていると高く評価された。写真（右）は大阪を紹介した箇所。



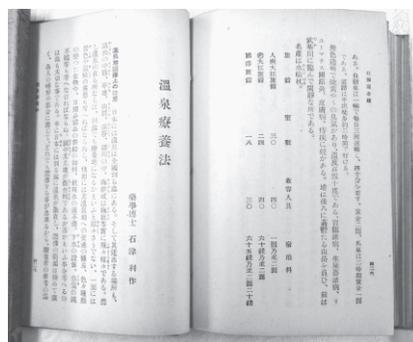
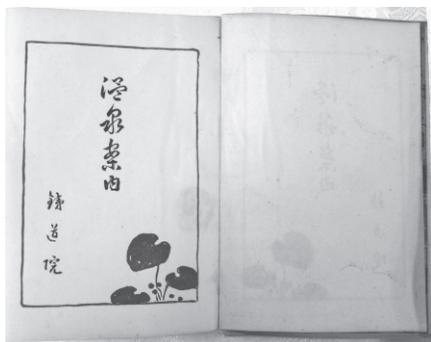
5.

1921年（大正10年）に鉄道院から刊行された『鉄道旅行案内』。横長の判型の本で、大正の広重と呼ばれた吉田初三郎のパノラマ図が多数配されていて、旅情を誘う。写真は湘南方面の図。左に江の島、その奥に富士山が見える。右は鎌倉方面で、山の間に大仏が座っている。遠景は横浜、東京方面である。



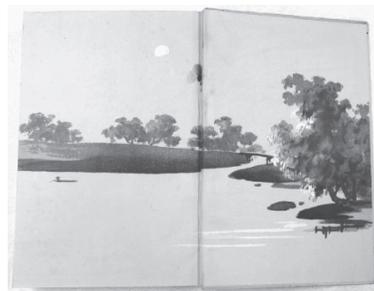
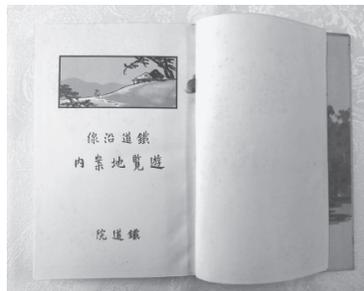
6.

1920年（大正9年）に鉄道院から刊行された『温泉案内』。小型のポケットサイズで、持ち運びが容易な大きさになっている。巻末には「温泉療養法」が添えられている。



7.

1913年（大正2年）に鉄道院から刊行された『鉄道沿線遊覧地案内』。山と清流を描いた表紙、湖沼の風景を描いた内扉などが、人々を景勝地へと誘う。



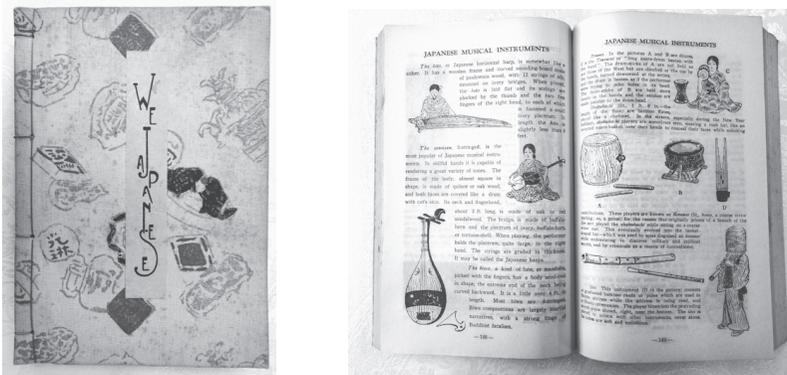
8.

『保養遊覧 日本温泉案内』の1917年（大正6年の初版）と1918年（大正7年版）。初版刊行後、またたくまに版を重ねた当時のベストセラー。写真の右側は初版。表紙には湯に浸かる鹿が描かれ、傷を癒すイメージが伝わる。左側の1918年版では、表紙は湖の景勝地になっていて、むしろ遊覧・観光気分を引き出すものになっている。巻末には「入浴者の心得」が添えられている



9.

富士屋ホテルから出された『We Japanese』。写真は1950年版。チェンバレンの『日本事物誌』をお手本のひとつにしたという日本のさまざまなものに対する記述は、きわめて精緻かつ多岐に亘っている。写真は日本の楽器についての説明のページ。美しい和綴じの本。



10.

1927年（昭和2年）の「日本八景」選考結果を知らせる案内。選定された8カ所の風景の写真が添えられている。これは「別府温泉」と「室戸岬」のもの。室戸岬では右下の道路に自動車が入っているのがわかる。

